

人口動態統計等から見る両磐圏域の状況

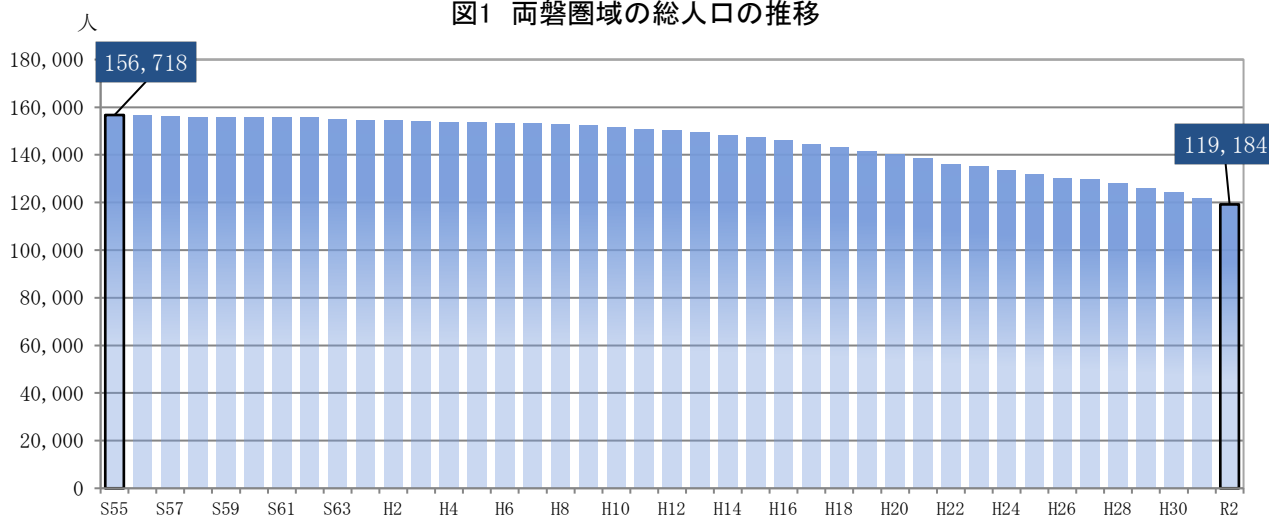
※このホームページで用いているデータは、人口動態統計等から得られた数値及びその数値を基に必要な計算を行い算出しています。従って、計算を行うための基となるデータが得られない等の理由で提供データの開始年次に差が生じています。

I 人口の推移

1 総人口の推移

両磐圏域の人口は、昭和55年の156,718人から減少傾向にあり、平成13年からは毎年千人程度減少しています。令和2年は119,184人と約40年で37,534人減少しています(図1)。

図1 両磐圏域の総人口の推移

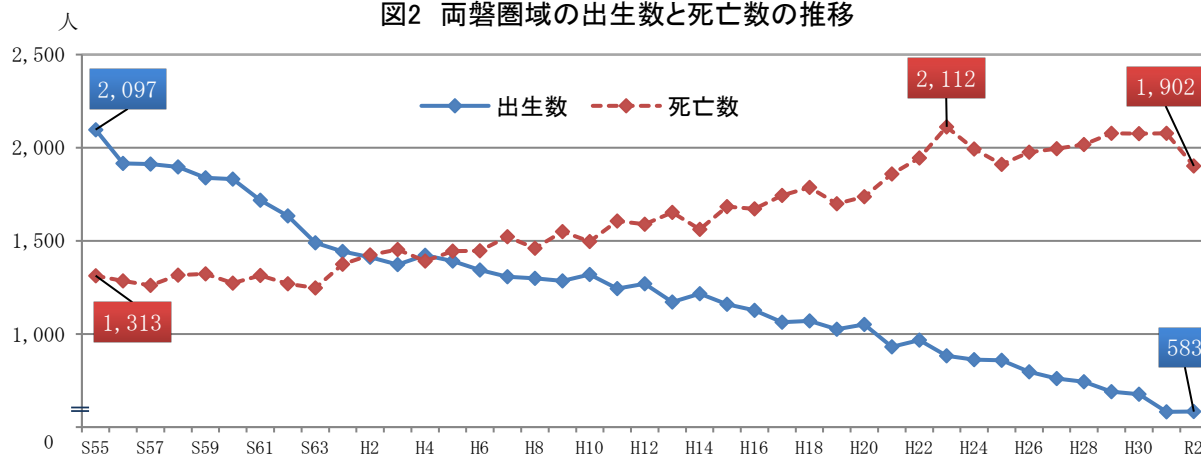


2 人口構成の推移

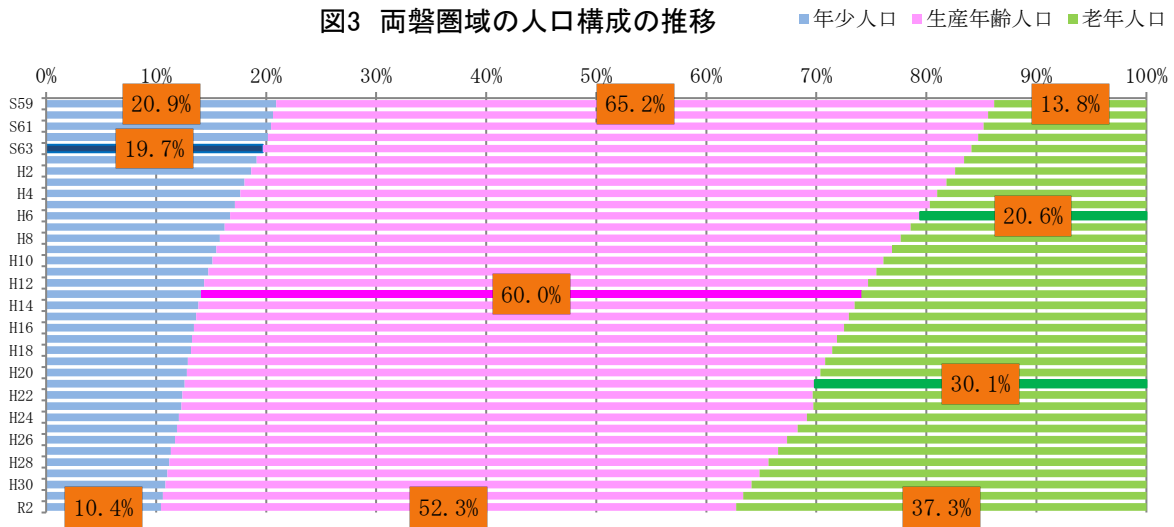
両磐圏域の1年当たりの出生数は、昭和55年には2,097人でしたが、令和2年は583人と1,514人減少しました。一方、死亡数は、昭和55年の1,313人から平成23年には2,112人と初めて2千人を超え、翌年からは再び1,900人台となりました。令和2年は1,902人でした(図2)。

出生数から死亡数を差し引いた自然増加数は、平成2年に初めてマイナスに転じ、平成4年に再びプラスとなりましたが、平成5年からマイナスで推移し、その差は年々大きく開いています。令和2年の自然増加数は1,319人減でした。

図2 両磐圏域の出生数と死亡数の推移



両磐圏域の総人口に占める各区分の割合を昭和59年から経年的に見たものが「図3」です。
 年少人口は昭和63年に19.7%となり、令和2年は10.4%まで低下しています。
 老年人口は平成6年に20.6%、平成21年に30.1%となり、令和2年は37.3%とおおよそ3人に1人が65歳以上という状況です。

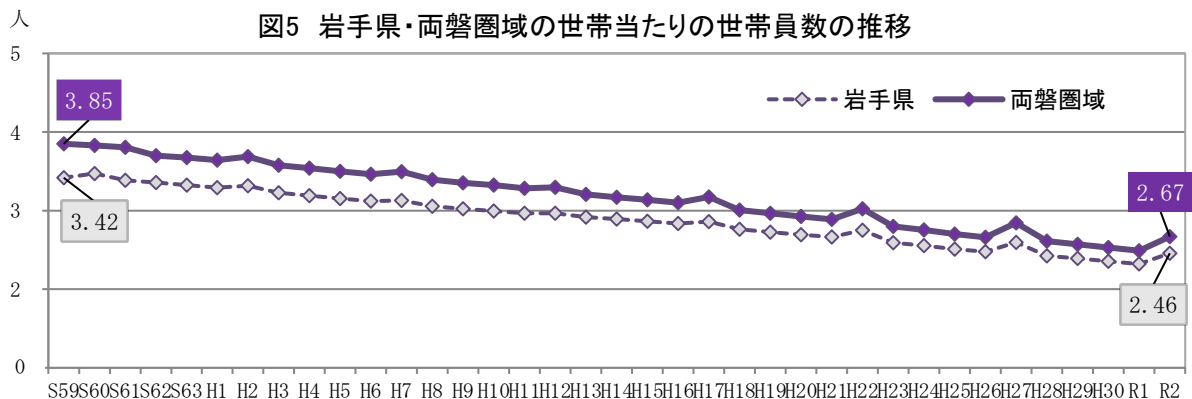
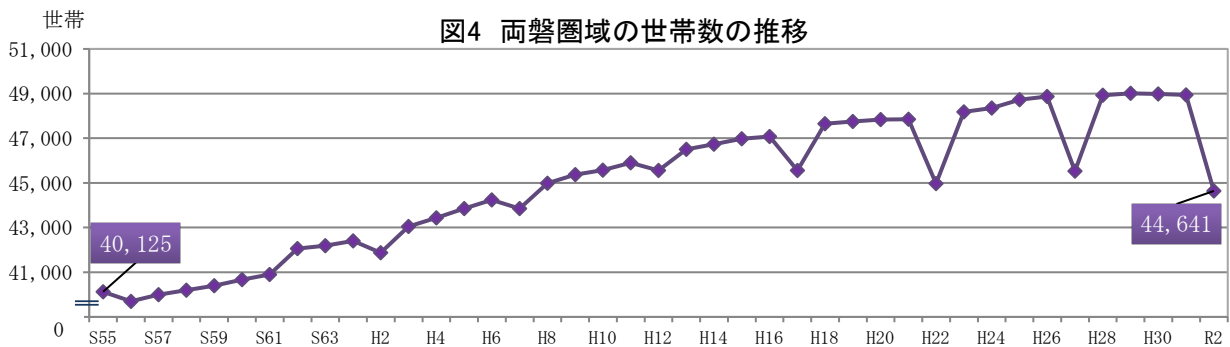


3 世帯数及び世帯当たりの世帯員数の推移

両磐圏域の世帯数は、昭和55年の40,125世帯から令和2年には44,641世帯と、約40年で4,516世帯増加しています(図4)。

総人口を世帯数で割った世帯当たりの世帯員数は、昭和59年の3.85人から令和2年は2.67人と減少しています(図5)。

なお、世帯数は、国勢調査年は国勢調査による数値、それ以外は住民基本台帳による数値となっています。

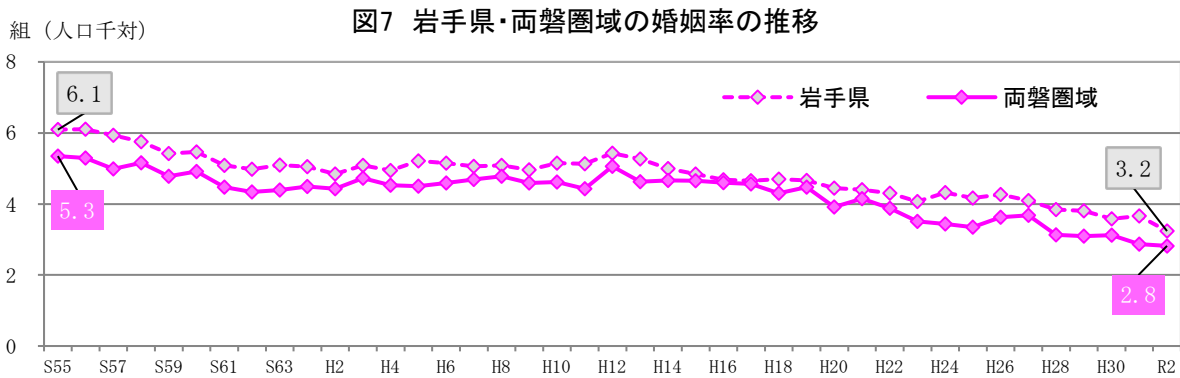
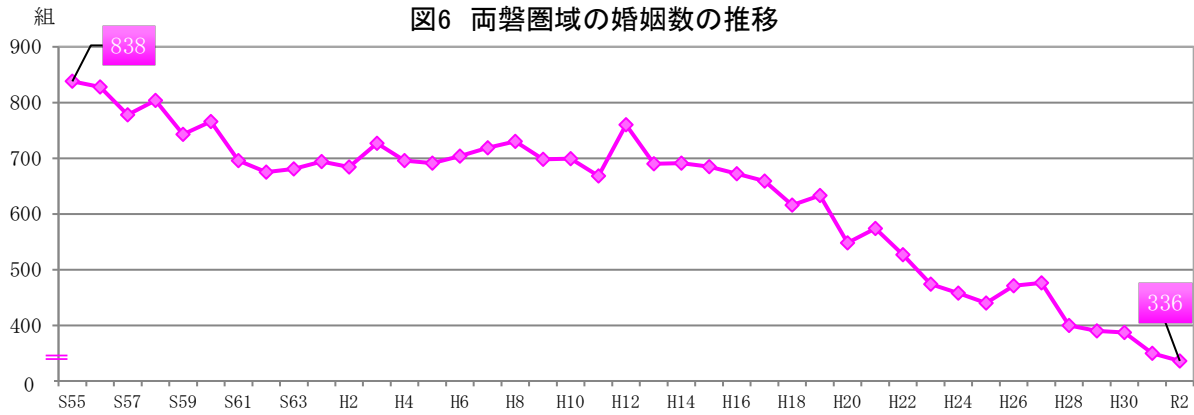


II 婚姻及び離婚の推移

1 婚姻数及び婚姻率の推移

出生は婚姻等との関連が大きいところですが、両磐圏域の婚姻数は昭和55年の838組から減少傾向にあり、令和2年は336組となりました(図6)。

人口千人当たりの婚姻率は、いずれの年次も岩手県より低く推移しています(図7)。



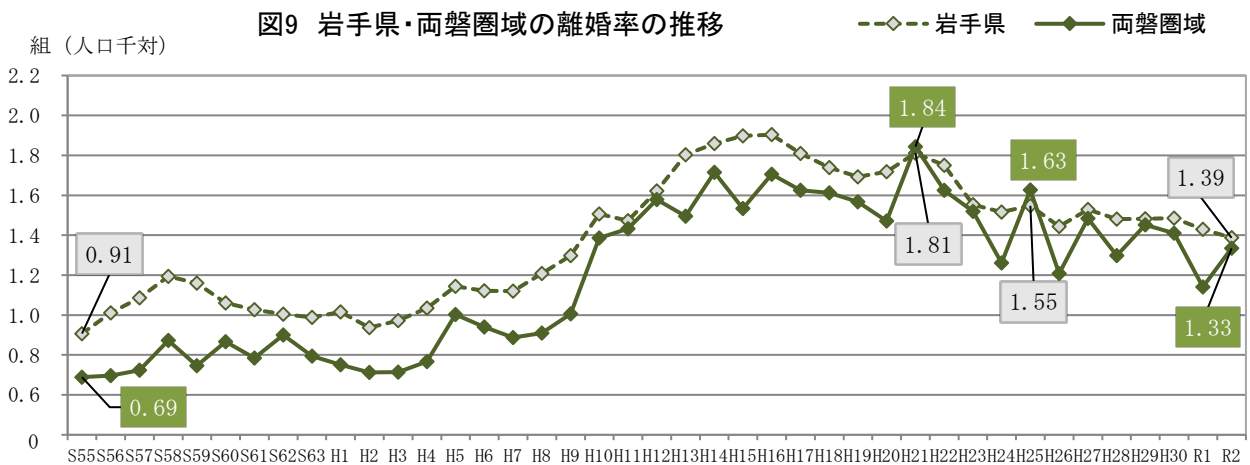
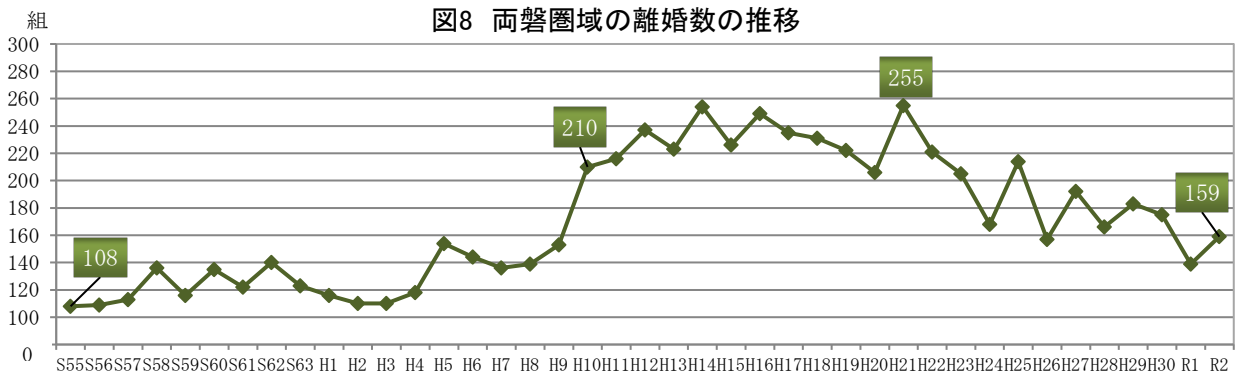
2 婚姻率の圏域別順位 (令和2年高率順)

	岩手県	1位	2位	3位	5位	6位	8位	9位		
圏域名		盛岡	中部	胆江	釜石	宮古	両磐	気仙	久慈	二戸
婚姻率	3.2	3.7	3.4	3.1	3.1	2.9	2.8	2.8	2.3	1.9

3 離婚数及び離婚率の推移

両磐圏域の離婚数は、昭和55年の108組から平成10年以降は200組を超えて推移していましたが、平成21年をピークに平成22年から低下傾向となり、令和2年は159組でした(図8)。

人口千人当たりの離婚率は、岩手県全体より低く推移しています(平成21年、25年を除く)(図9)。



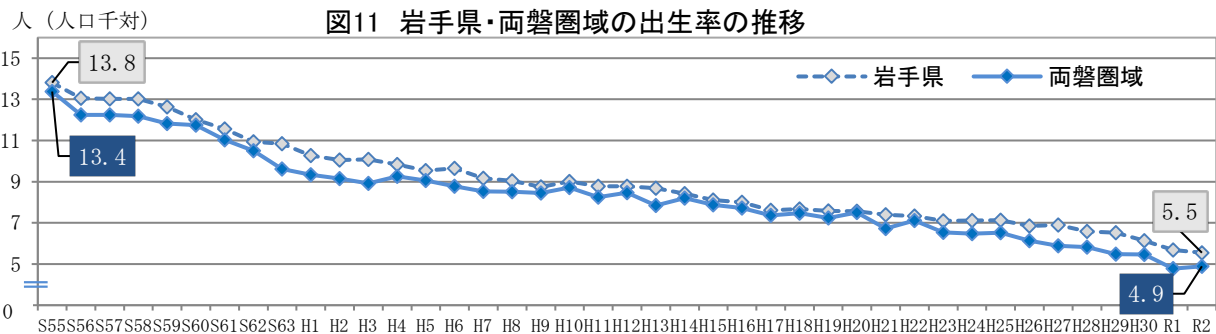
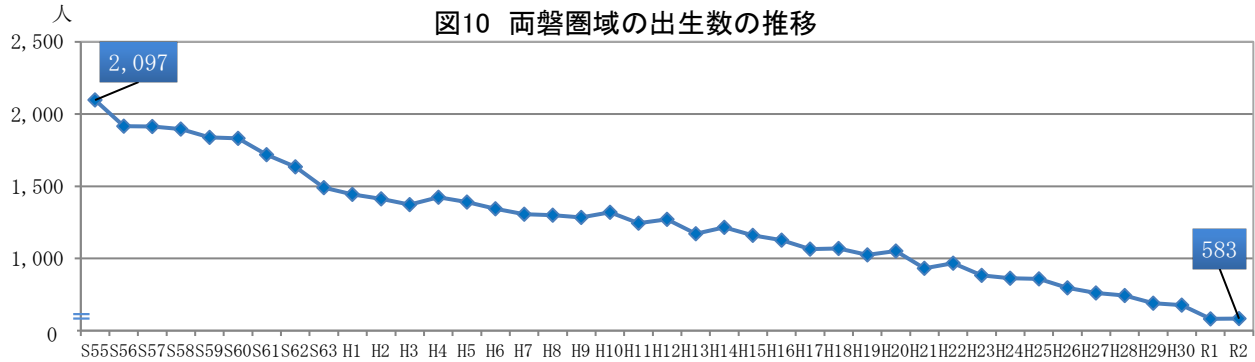
4 離婚率の圏域別順位 (令和2年低率順)

	岩手県	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位
圏域名		釜石	久慈	二戸	気仙	両磐	盛岡	中部	宮古	胆江
離婚率	1.39	1.07	1.12	1.20	1.24	1.33	1.39	1.42	1.60	1.61

Ⅲ 出生、周産期死亡、死産、乳児死亡等の推移

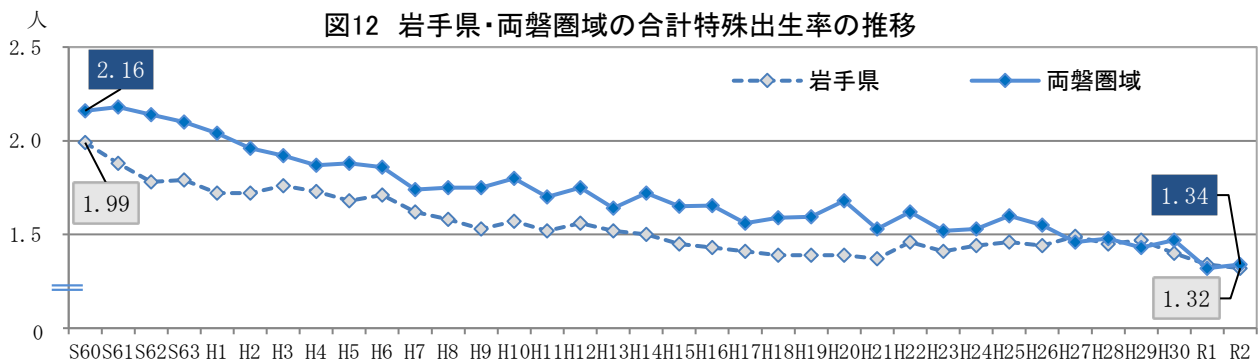
1 出生数及び出生率の推移

両磐圏域の出生数は、昭和55年に2,097人でしたが令和2年には583人と1,514人減少しています(図10)。人口千人当たりの出生率も、昭和55年の13.4から令和2年は4.9と低下しており、いずれの年次も岩手県全体より低く推移しています(図11)。



2 合計特殊出生率の推移

一人の女性が一生に産む子どもの数を表す指標の合計特殊出生率について、両磐圏域は昭和60年は2.16でしたが、令和2年は1.34でした。合計特殊出生率は岩手県全体より高い傾向を示していましたが、近年は県と同程度または下回るようになってきています。(図12)。



3 合計特殊出生率の圏域別順位 (令和2年高率順)

	岩手県	1位	3位	4位	5位	6位	8位	9位		
圏域名		胆江	宮古	気仙	久慈	両磐	盛岡	中部	二戸	釜石
合計特殊出生率	1.32	1.44	1.44	1.36	1.35	1.34	1.30	1.30	1.19	1.17

4 周産期死亡数・率の推移

妊娠満22週以降の死産（以下、「後期死産」と言います。）及び出生後満7日未満の死亡（以下、「早期新生児死亡」と言います。）を周産期死亡と言います。周産期死亡率は、出産（出生数と妊娠満22週以後の死産数の合計）千対の率です。

両磐圏域の周産期死亡数は、昭和57年の31人から減少傾向にあり、平成21年以降は5人以下で推移しています。令和2年は0人でした（図13）。

周産期死亡率は、大きな幅で上昇と低下を繰り返し、平成20年までは岩手県全体より高い年次が多くあり、平成21年以降は岩手県全体より低い年次が多い傾向にあります。令和2年は0.0でした（図14、図15）。

図13 両磐圏域の周産期死亡数の推移

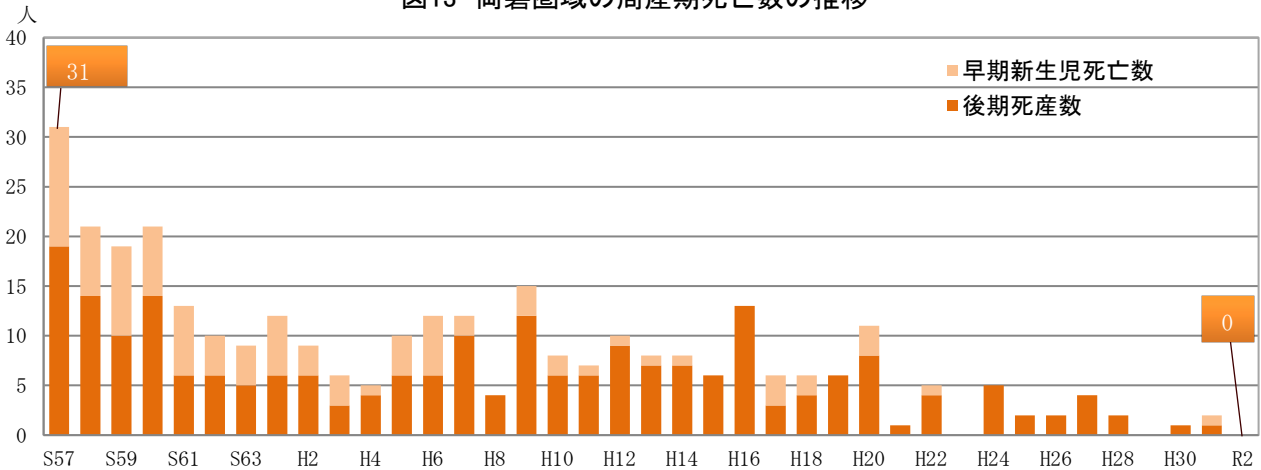


図14 両磐圏域の周産期死亡率の推移

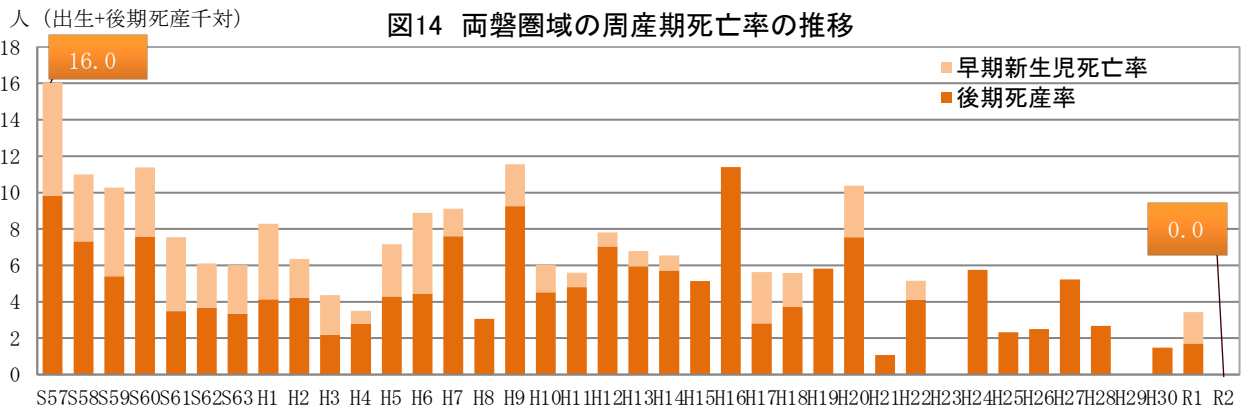
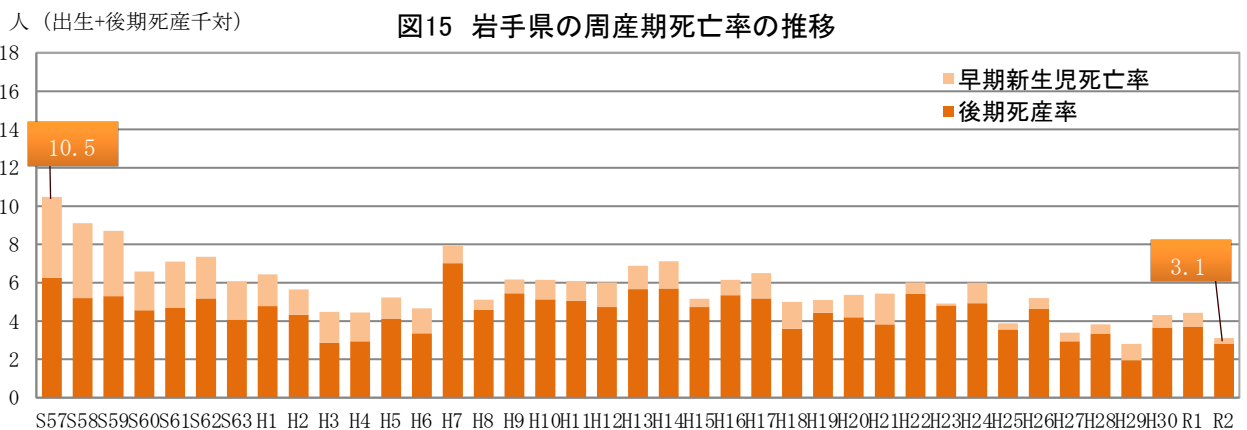


図15 岩手県の周産期死亡率の推移



5 死産数・率の推移

両磐圏域は昭和55年の138人から減少傾向で推移し、平成17年以降は横ばいで推移しています。令和2年は16人でした(図16)。

出産千人当たりの死産率は、昭和55年から低下傾向で推移していますが、平成24年は岩手県全体より高い死亡率となりました。平成25年は前年より低くはなりましたが、平成26年、27年は岩手県全体より僅かに高くなり、令和2年は26.7と岩手県全体より高い死亡率となっています。また、内訳は人工死産が高い年次が多いですが、平成24年は自然死産が26.8と昭和57年、60年に次いで高くなっています(図17、図18)。

図16 両磐圏域の死産数の推移

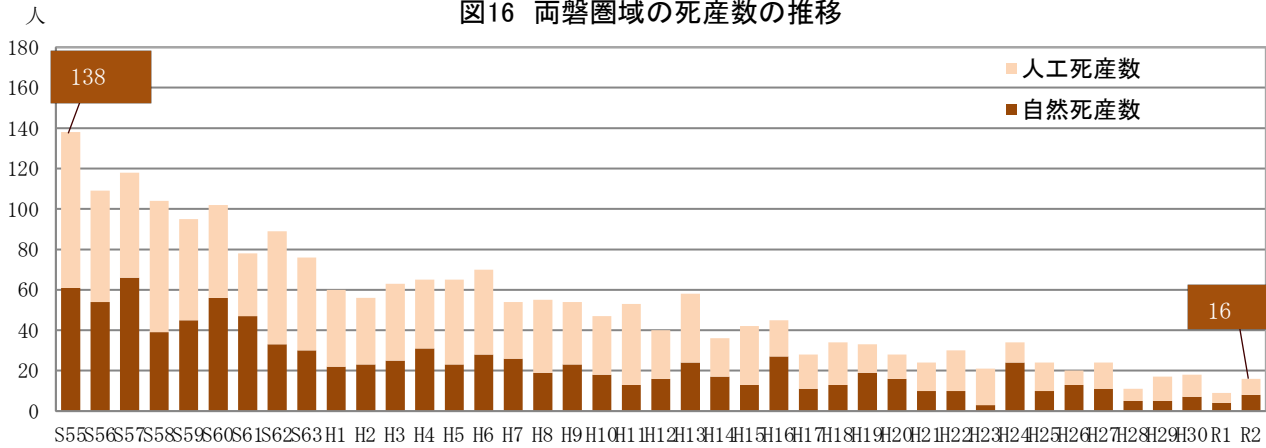


図17 両磐圏域の死産率の推移

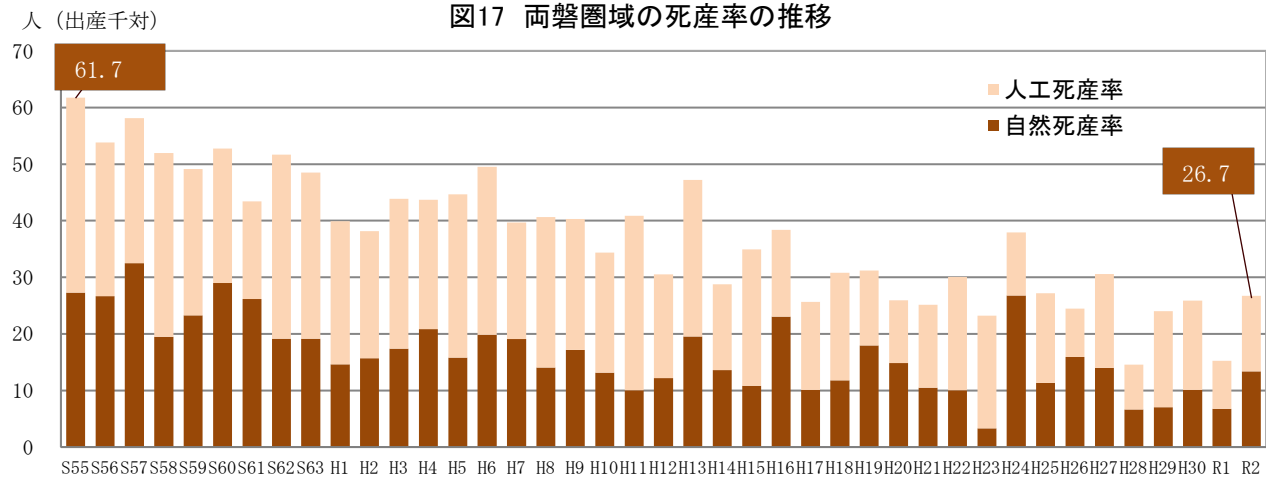
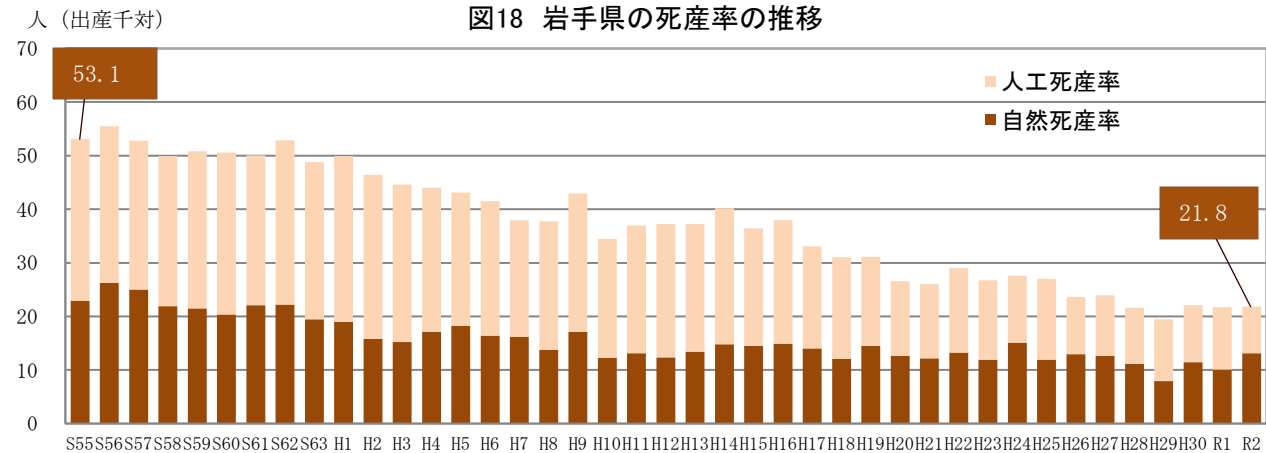


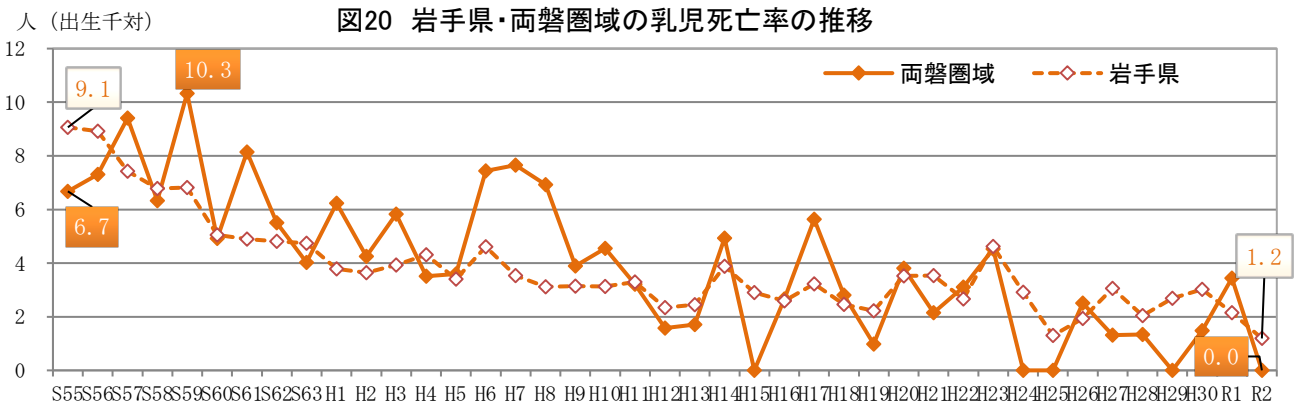
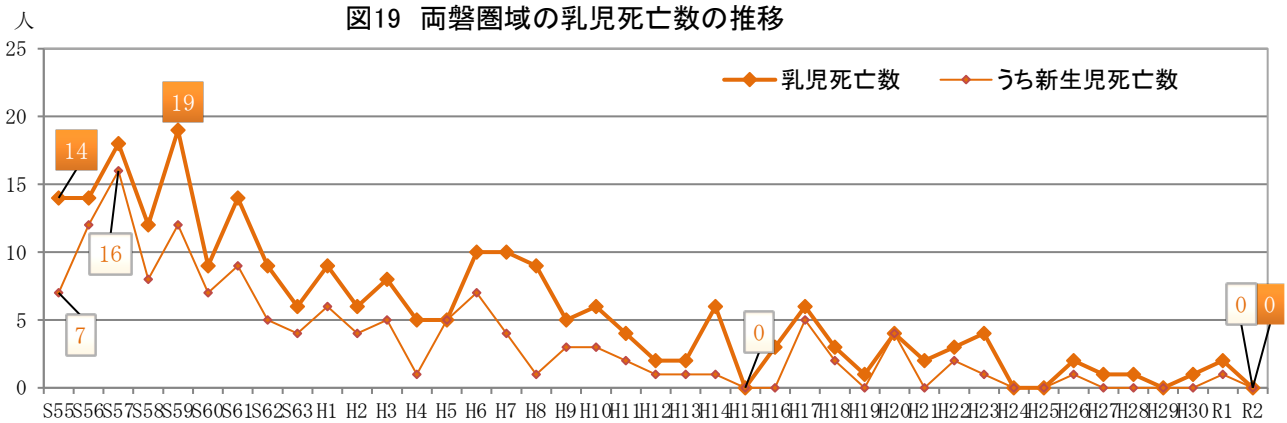
図18 岩手県の死産率の推移



6 乳児死亡数・率の推移

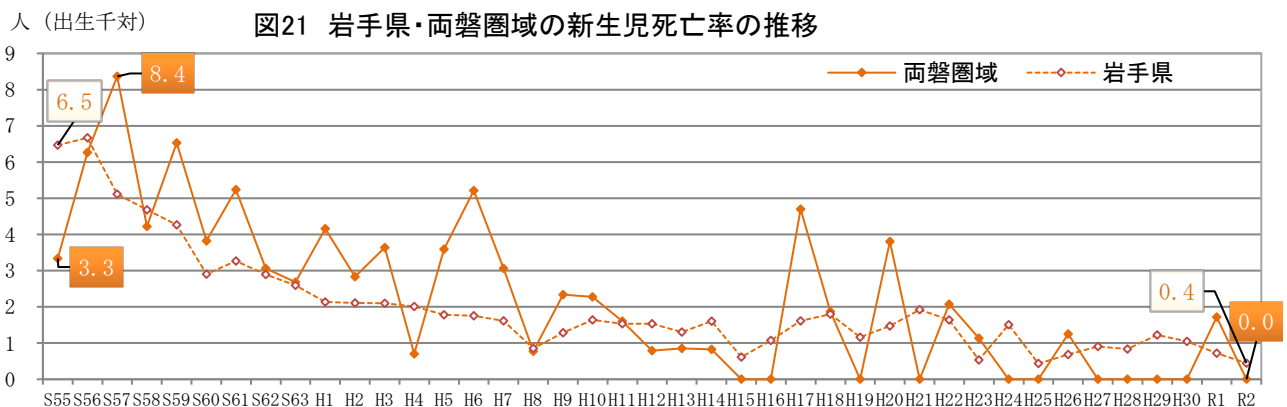
両磐圏域の乳児死亡数は、昭和55年の14人から昭和59年には19人まで増加しましたが、増減を繰り返しながら減少し、令和2年は0でした(図19)。

このうち生後4週間未満(新生児)死亡も昭和55年の7人から昭和57年は16人に急増しましたが、大きく増減しながら減少傾向にあります。令和2年は0でした。(図19)。出生千人当たりの乳児死亡率は大きく上昇と低下を繰り返しながらも低下傾向にあります。令和2年は0.0でした(図20)。



7 新生児死亡率の推移

出生千人当たりの新生児死亡率は、昭和55年の3.3から昭和57年に8.4と急激に高くなりました。昭和58年以降は大きく上昇と低下を繰り返しながらも低下傾向となり、令和2年は0.0でした(図21)。

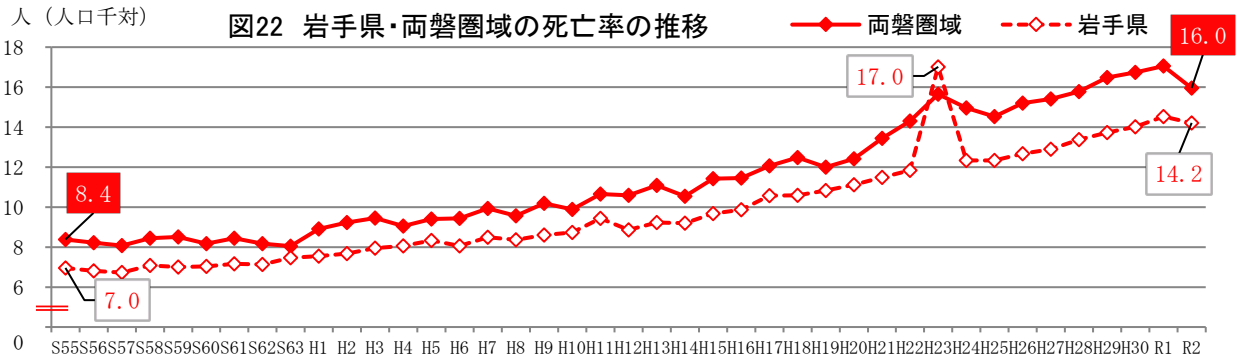


IV 死亡の推移

1 死亡率の推移

両磐圏域の死亡数が増加していることは前述のとおりです(図2)が、人口千人当たりの死亡率も、昭和55年の8.4から令和2年には16.0に上昇しています。岩手県全体と比較すると、平成23年を除きどの年次も岩手県全体よりも高く推移しています(図22)。

なお、岩手県全体の平成23年死亡率が高いのは、東日本大震災津波による不慮の事故の死亡が多いためです。



2 年齢調整死亡率の推移

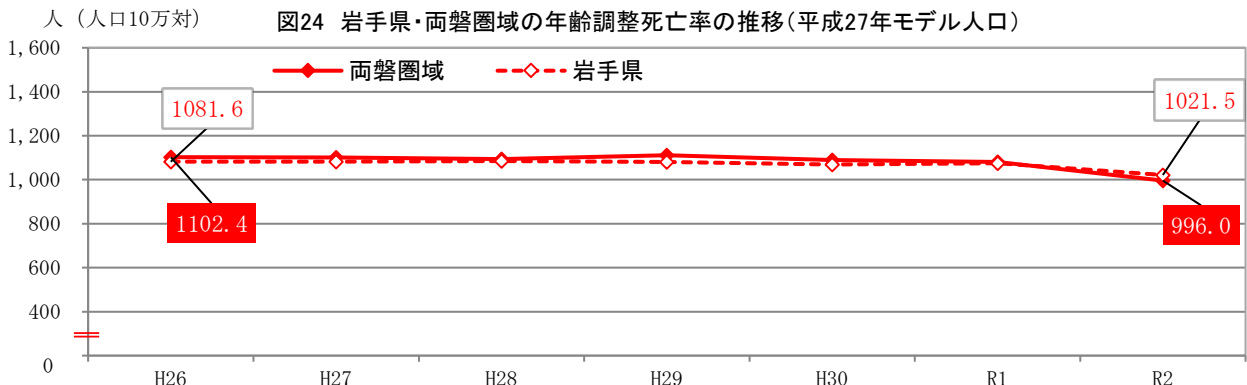
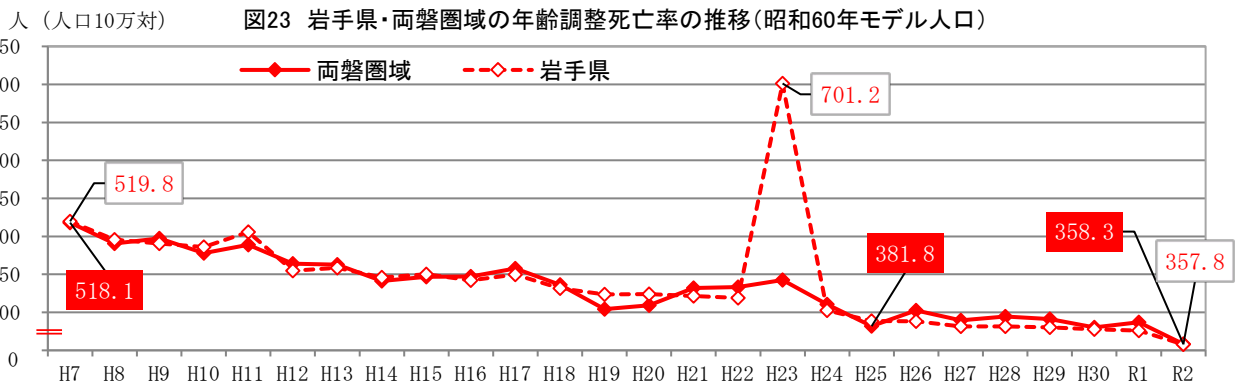
(図23)の人口10万人当たりの年齢調整死亡率※で見ると、両磐圏域の平成7年の518.1から平成25年には381.8と低下し、令和2年は357.8でした。岩手県全体の平成23年死亡率が高いのは、東日本大震災津波による不慮の事故の死亡が多いためです。

なお、(図23)(図24)を見ると、ほとんどの年次で岩手県全体より高くなっていますが、概ね岩手県全体に近い死亡率で推移しています。

※年齢調整死亡率:年齢構成の異なる地域間で死亡の状況を比較できるように年齢構成を調整した死亡率が年齢調整死亡率(人口10万人当たり)です。年齢調整死亡率は、従来昭和60年モデル人口(国勢調査人口を基に補正した人口)を使用した数値を掲載していましたが、令和4年2月25日に厚生労働省が「年齢調整死亡率の基準人口について」を改訂し、新たに平成27年モデル人口(国勢調査人口を基に補正した人口)を使用することとなりました。この基準人口改訂は、近年の高齢化による人口構成の変化を反映したものとなっています。

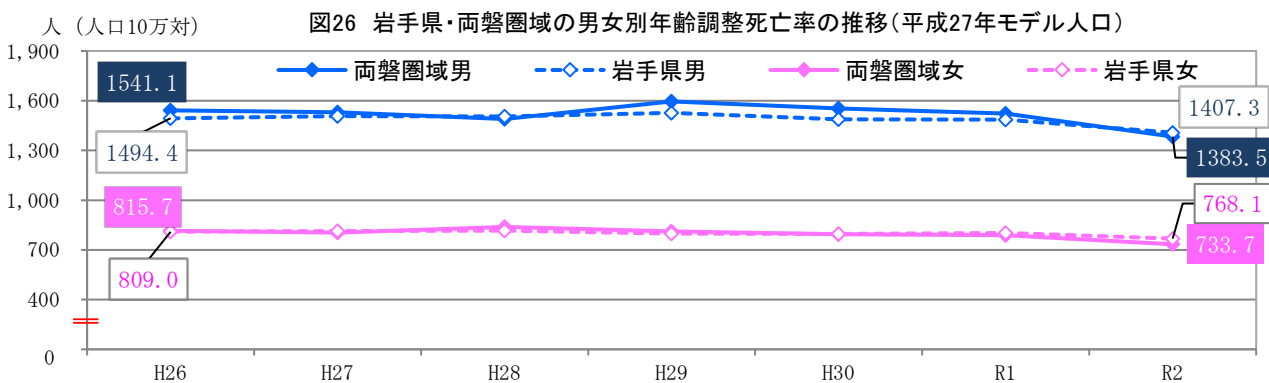
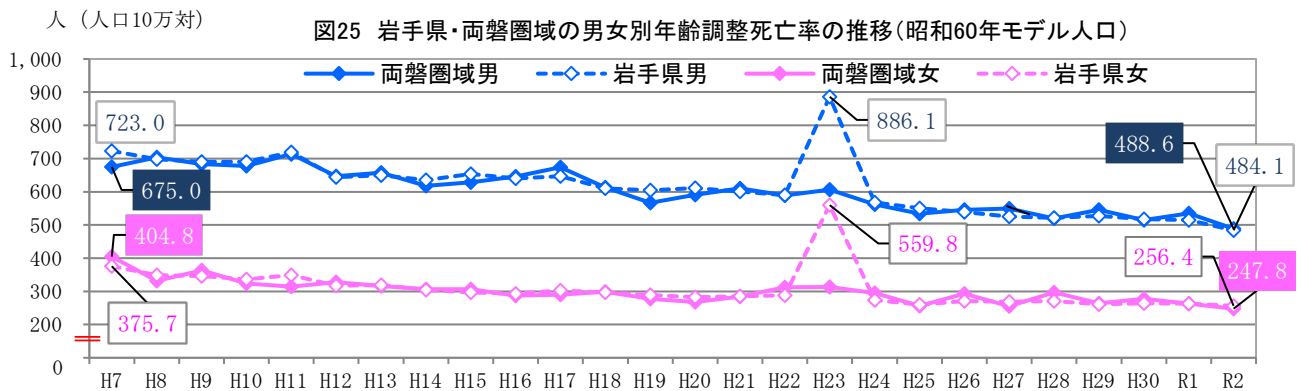
なお、県や市町村の健康増進計画等で使用している年齢調整死亡率は、昭和60年モデル人口を使用した数値を用いており、継続した経年比較や傾向把握が必要であることから、従来に引き続き昭和60年モデル人口を使用した数値を掲載しています。また、新たな県の健康増進計画との比較を考慮し、現行計画の期間(平成26年～令和5年)分について、平成27年モデル人口を使用した数値も掲載しています。

岩手県の年齢調整死亡率は不詳人口を按分して算出、両磐圏域は不詳人口を除いて算出しています。



3 男女別年齢調整死亡率の推移

年齢調整死亡率は、男女で大きく異なることから、男女別で(図25)(図26)に示します。
 (図25)を見ると、両磐圏域の男性は、平成7年の675.0から令和2年は488.6にまで低下しています。女性は、平成7年の404.8から令和2年は247.8にまで低下して推移していることがわかります。
 なお、(図25)(図26)を見ると、両磐圏域は年ごとの変動はあるものの、岩手県全体とほぼ同程度で推移しています。男性は女性の約2倍前後の値で推移し、男性の死亡率が高い状況です。



4 年齢調整死亡率の死因別順位

死因別の年齢調整死亡率について、岩手県・両磐圏域の男女別にその値を求め、死因毎に値の高い順に5位までを下表に示しています。

区分(昭和60年モデル人口)			第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	
令和2年	男性	岩手県	死因	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	自殺	不慮の事故
		年齢調整死亡率	153.9	67.7	51.0	25.1	21.1	
	両磐圏域	死因	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	不慮の事故	自殺	
	年齢調整死亡率	138.3	76.4	58.8	33.5	25.1		
女性	岩手県	死因	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	老衰	自殺	
	年齢調整死亡率	92.2	33.2	25.7	17.3	11.3		
両磐圏域	死因	悪性新生物	脳血管疾患	心疾患	老衰	肺炎		
年齢調整死亡率	93.7	26.8	23.0	18.7	10.4			

区分(平成27年モデル人口)			第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	
令和2年	男性	岩手県	死因	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	肺炎	老衰
		年齢調整死亡率	411.6	213.0	147.2	85.0	82.8	
	両磐圏域	死因	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	老衰	肺炎	
	年齢調整死亡率	393.4	210.1	154.8	116.3	71.0		
女性	岩手県	死因	悪性新生物	心疾患	老衰	脳血管疾患	肺炎	
	年齢調整死亡率	214.4	121.6	88.1	84.3	29.6		
両磐圏域	死因	悪性新生物	心疾患	老衰	脳血管疾患	肺炎		
年齢調整死亡率	219.5	95.0	92.9	77.6	35.2			

<参考>令和2年死因別死亡数順位

岩手県・両磐圏域の男女別に死因毎の死亡数の多い順から5位までを示しています。

岩手県と両磐圏域で比較すると、男性は第1位「悪性新生物」から第3位「脳血管疾患」まで同じ順位となっており、第4位は岩手県は「肺炎」で両磐圏域は「老衰」、第5位は岩手県は「老衰」で両磐圏域は「肺炎」となっています。女性は第1位「悪性新生物」から第5位「肺炎」まで同じ順位となっています。

区分		第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	
令和2年	男性	岩手県	死因 悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	肺炎	老衰
		死亡数	2,562	1,254	889	487	428
	両磐圏域	死因	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	老衰	肺炎
		死亡数	270	139	104	73	47
	女性	岩手県	死因 悪性新生物	心疾患	老衰	脳血管疾患	肺炎
		死亡数	2,019	1,477	1,312	987	381
両磐圏域	死因	悪性新生物	心疾患	老衰	脳血管疾患	肺炎	
	死亡数	235	146	172	99	51	

5 悪性新生物の岩手県・両磐圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

「悪性新生物」について、岩手県全体・両磐圏域の男女別年齢調整死亡率の推移を(図27)(図28)に示します。

(図27)を見ると、両磐圏域では、男性は平成7年から大きく上昇と低下を繰り返しながら平成25年にかけて低下傾向にありましたが、平成27年は188.5と上昇した後、平成30年は152.9まで低下、令和2年は138.3と岩手県全体より低く推移しています。女性も平成7年から平成16年まで大きく上昇と低下を繰り返し、平成17年からは岩手県全体に近い死亡率で推移しています。令和2年は93.7でした。

(図28)を見ると、両磐圏域は年ごとの変動はあるものの、男女ともに概ね岩手県全体と同様の傾向を示しています。

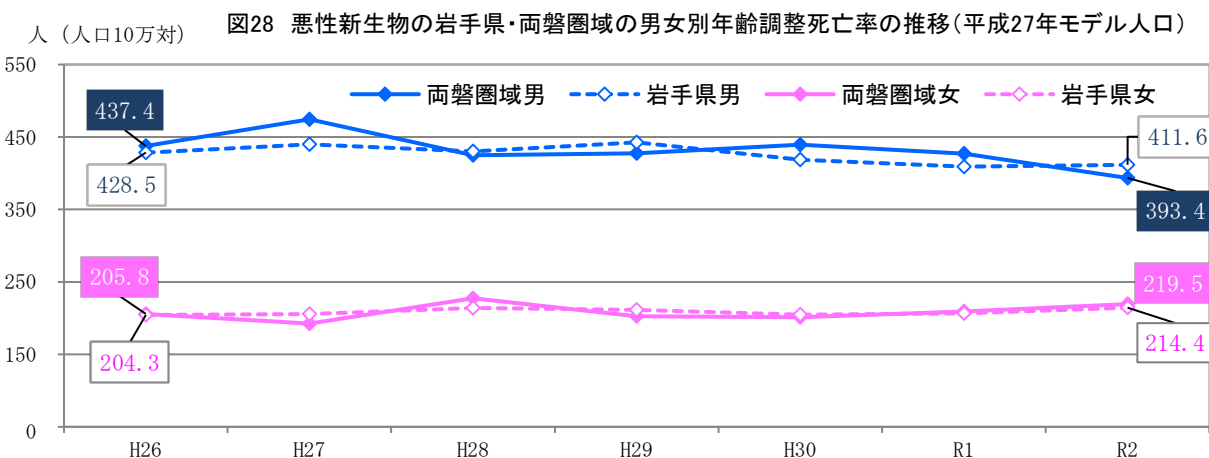
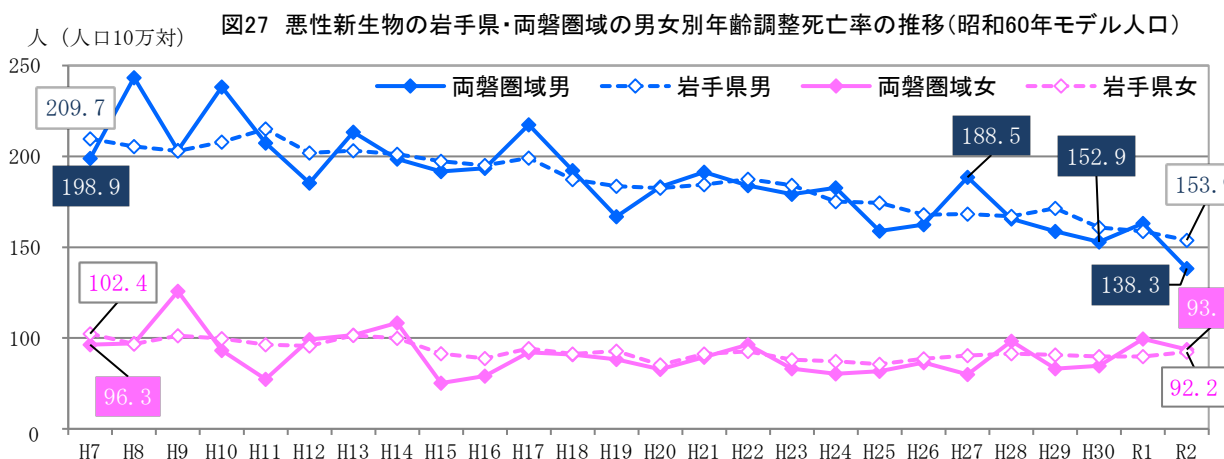


表1 悪性新生物の部位別年齢調整死亡率の順位

悪性新生物の部位別年齢調整死亡率について、令和2年の岩手県・両磐圏域の男女別にその値を求め、値の高い順から3位までを下表に示しています。

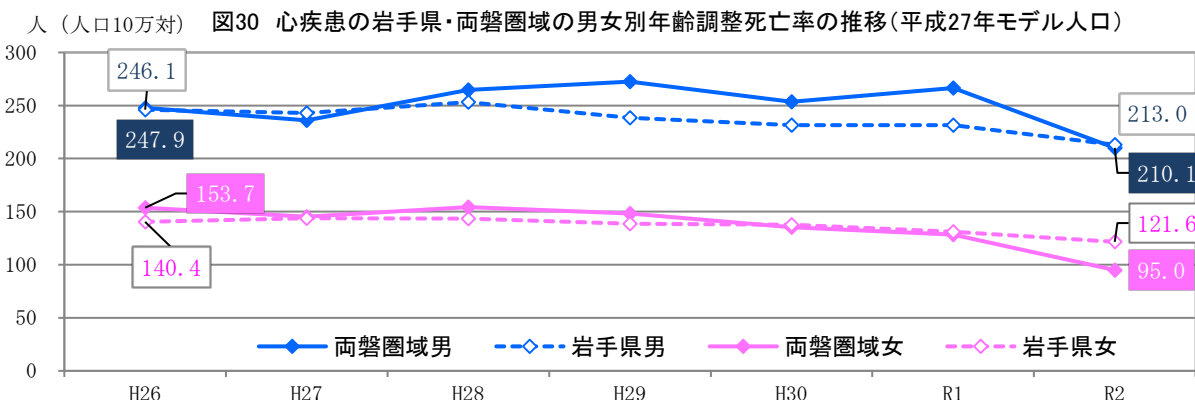
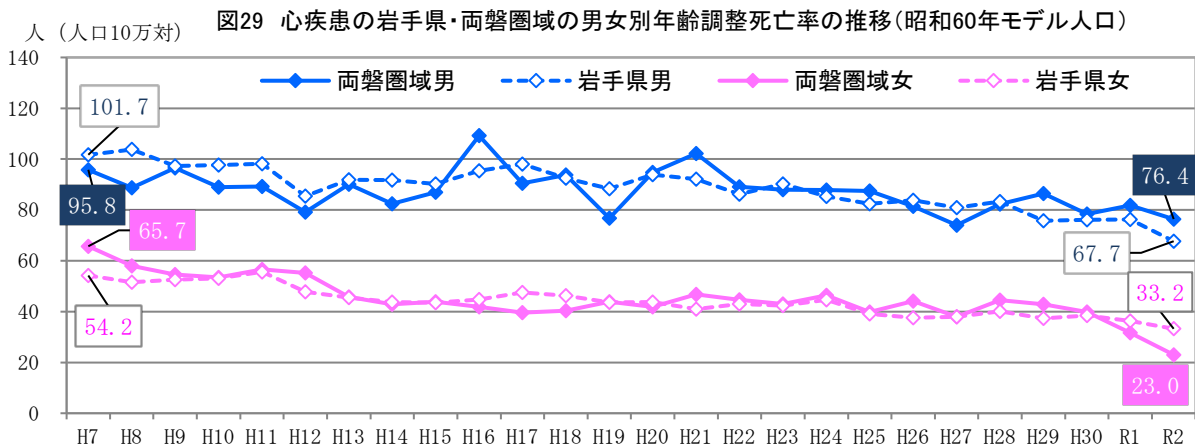
区分(昭和60年モデル人口)		第1位	第2位	第3位	
令和2年	男性	岩手県	死因 肺	死因 大腸	死因 胃
		年齢調整死亡率	35.2	26.0	20.6
	両磐圏域	死因 肺	死因 大腸	死因 胃	
		年齢調整死亡率	33.0	24.8	18.5
女性	岩手県	死因 大腸	死因 乳	死因 肺	
		年齢調整死亡率	14.5	13.4	9.4
	両磐圏域	死因 乳	死因 大腸	死因 子宮	
		年齢調整死亡率	16.2	14.3	10.8
区分(平成27年モデル人口)		第1位	第2位	第3位	
令和2年	男性	岩手県	死因 肺	死因 大腸	死因 胃
		年齢調整死亡率	93.5	66.2	55.2
	両磐圏域	死因 肺	死因 大腸	死因 胃	
		年齢調整死亡率	94.0	66.2	54.0
女性	岩手県	死因 大腸	死因 肺	死因 乳	
		年齢調整死亡率	37.8	26.0	23.1
	両磐圏域	死因 大腸	死因 乳	死因 肺	
		年齢調整死亡率	38.9	26.8	22.3

6 心疾患の岩手県・両磐圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

「心疾患」について、岩手県全体・両磐圏域の男女別年齢調整死亡率の推移を(図29)(図30)に示します。

(図29)を見ると、両磐圏域では、男性は平成22年以降は緩やかな低下傾向となっていました。近年は多少の上下はあるものの、岩手県全体の数値に近い値で推移していましたが、令和2年は76.4とやや高くなっています。女性は、平成7年から平成14年まで緩やかな低下傾向にありましたが、平成15年以降はほぼ横ばいで推移しています。概ね岩手県全体と同じ傾向で推移していますが、令和2年は23.0とやや低くなっています。

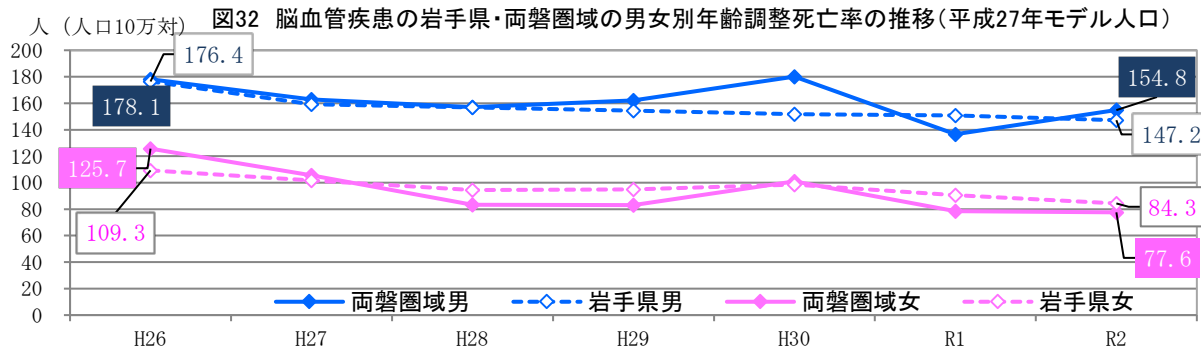
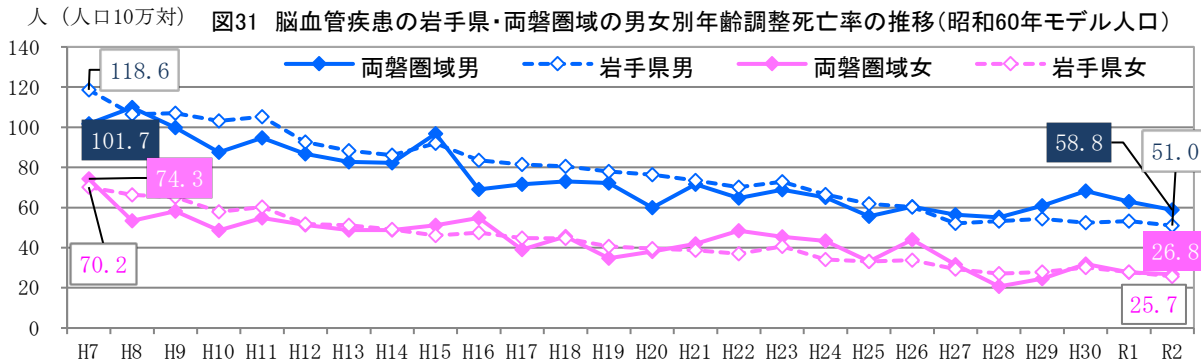
(図30)を見ると、両磐圏域の男性は、岩手県全体より高く推移している年次が多いですが、令和2年は岩手県全体より低く推移しています。女性は概ね岩手県全体と同様の傾向を示していますが、令和2年は低く推移しています。



7 脳血管疾患の岩手県・両磐圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

「脳血管疾患」について、岩手県全体・両磐圏域の男女別年齢調整死亡率の推移を(図31)(図32)に示します。
 (図31)を見ると、両磐圏域では、男性は、平成7年から概ね岩手県全体より低い死亡率で推移しながら低下傾向にあります。平成27年以降は岩手県全体より高い死亡率となりました。令和2年は58.8と岩手県全体より高く推移しています。女性は、近年は多少の上下はあるものの、岩手県全体の数値に近い値で推移していますが、令和2年は26.8とやや高く推移しています。

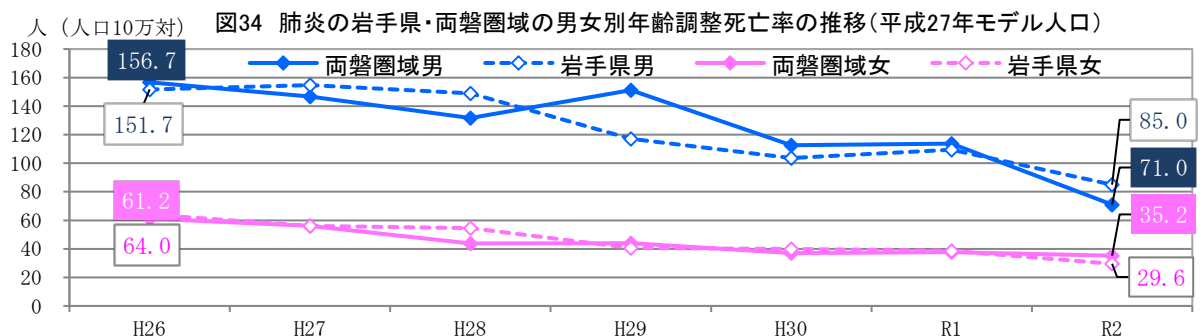
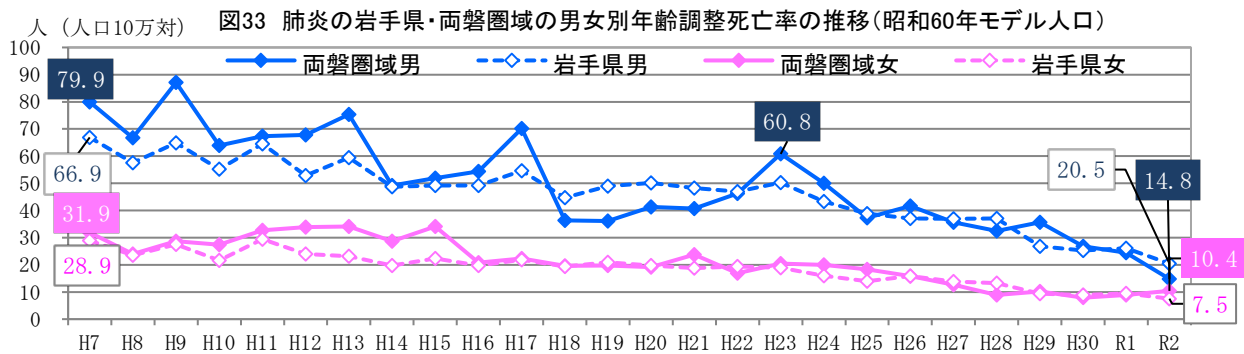
(図32)を見ると、両磐圏域は年ごとの変動はあるものの、男性は岩手県全体より高く推移している年次が多く、女性は低く推移している年次が多くなっています。



8 肺炎の岩手県・両磐圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

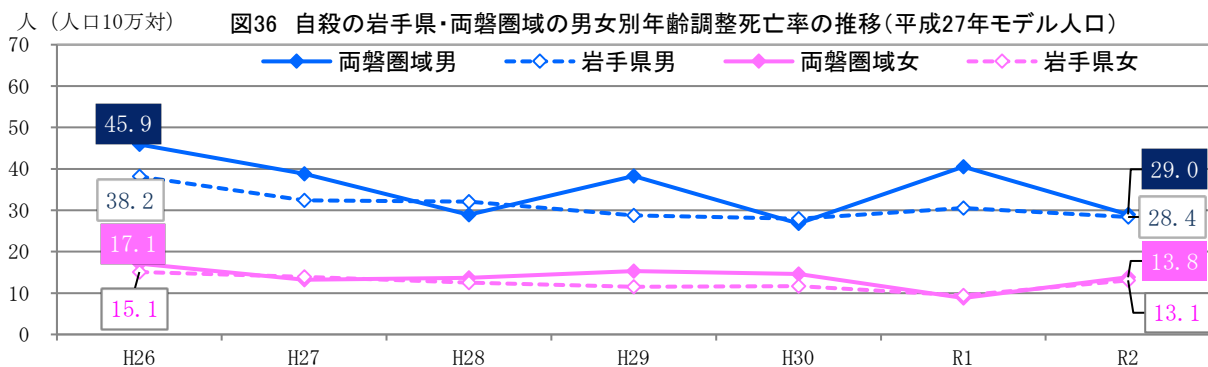
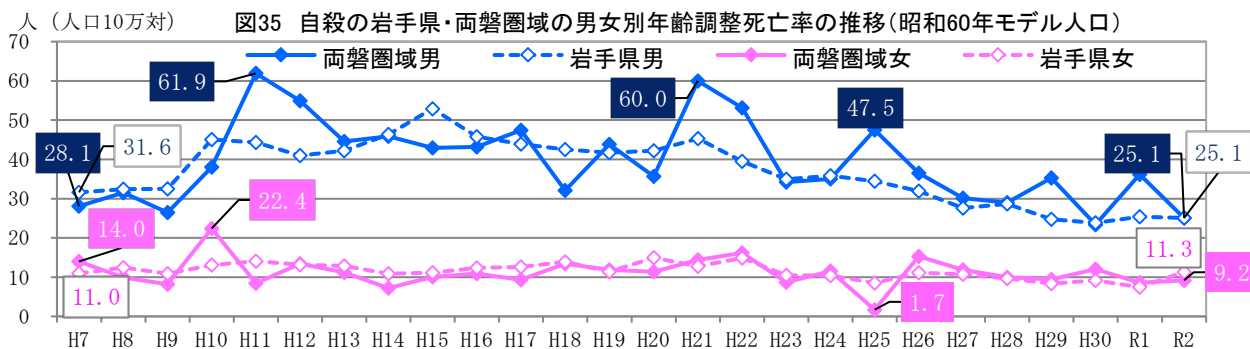
「肺炎」について、岩手県全体・両磐圏域の男女別年齢調整死亡率の推移を(図33)(図34)に示します。
 (図33)を見ると、両磐圏域では、男性は平成7年から大きく上昇と低下を繰り返し近年では平成23年に60.8と高い死亡率となりました。その後概ね低下傾向を示し、令和2年は14.8と岩手県全体より低く推移しています。女性は、平成7年から平成15年まで岩手県全体より高い死亡率で推移し、平成16年からは岩手県全体に近い死亡率で推移しているものの、令和2年は10.4と高く推移しています。

(図34)を見ると、両磐圏域の男性は、岩手県全体より高く推移している年次が多いですが、令和2年は岩手県全体より低く推移しています。女性は概ね岩手県全体と同様の傾向を示していますが、令和2年は高く推移しています。



9 自殺の岩手県・両磐圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

「自殺」について、岩手県全体・両磐圏域の男女別年齢調整死亡率の推移を(図35)(図36)に示します。
 (図35)を見ると、両磐圏域では、男性は平成10年から上昇傾向となり、平成11年、平成21年に大きな山を形成しています。平成23年、平成24年は岩手県全体より僅かに低い死亡率でしたが、平成25年以降は岩手県全体より高い死亡率となっています。令和2年は25.1と岩手県全体と同じ値で推移しています。女性は平成10年に山があり、平成12年以降は岩手県全体に近い死亡率で推移していました。平成25年は最も低い死亡率となりましたが、翌年上昇し、岩手県全体より高い死亡率となりました。近年は多少の上下はあるものの、岩手県全体の数値に近い値で推移していましたが、令和2年は9.2とやや低く推移しています。
 (図36)を見ると、両磐圏域の男性は年ごとの変動はあるものの、岩手県全体より高く推移している年次が多く、女性はほとんどの年次で岩手県全体より高くなっていますが、概ね岩手県全体に近い死亡率で推移しています。



10 老衰の岩手県・両磐圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

「老衰」について、岩手県全体・両磐圏域の男女別の年齢調整死亡率の推移を(図37)(図38)に示します。
 (図37)を見ると、男女とも岩手県全体より低い値で推移してきましたが、平成18年頃から上昇傾向になりました。令和2年は男女ともに岩手県全体より高い値となり、男性が20.2、女性が18.7でした。
 (図38)を見ると、両磐圏域は年ごとの変動はあるものの、令和2年は男女ともに岩手県全体より高く推移しています。

